御黛山と藤原という地名

下御糸海岸の下御糸漁港近くに、「御黛山」の標柱が建てられています。

江戸時代に作られた『勢陽雑記』には、斎王の眉を書くために使う黛を焼いて献上していたことや、天皇の御車を曳く牛を献上したために「藤原」という名を賜ったと紹介されています。

また、御黛山がある「北藤原」を含めた「中村」、「南藤原」という地名にも斎宮・斎王との深い関わりがあります。今はそれぞれ別の自治会になっていますが、平安時代ごろまでは「藤原」という一つの村だったようです。

『畠田神社誌』では、藤原関雄という人がいて、仁明天皇の承和年間から光孝天皇の元慶年間までの 40 年余りの長い間、斎宮寮に仕え、職を辞する時、朝廷から長年の功労を労い土地が贈られた。関雄はその御恩に報いるため、土地の開拓に努め、地元の人びとはその功績を讃えて、そのまま村の名前にしたといわれています。

御黛山と藤原の地名は、斎宮・斎王との関わりが斎宮地区だけでなく明和町全域に広がっていることを教えてくれています。

昭和 28 年（1953）の北藤原付近の海岸

御黛山の伝承地（現在の下御糸漁港付近）

キーワード：斎宮、斎王、藤原、御黛山